

地域の概要



南さつま市全体の人口は30,600人（R7.10月末）
 高齢化率は42.2%（R7.4.1日現在）
 旧5市町（加世田市・笠沙町・大浦町・坊津町・金峰町）が合併し、R7.11月に市制施行20周年をむかえた



目指す姿

●人生の最終段階において、自宅や施設、医療機関のどこにおいても、看取りを含めた医療・ケアが本人の望むものとなる

これまでの経緯

年・月	出来事
令和4年	ACPの普及啓発やエンディングノートの作成の検討
令和5年	「看取り」に関するアンケートを実施（南さつま市圏域の施設等）アンケートの内容をもとに、在宅医療・介護連携推進連絡協議会で意見交換
令和6年	「ACPのはじめの一歩」のテーマで講演とグループワーク、106名参加 「私の想いを伝えるノート」の完成
令和7年	南さつま市の※多職種連携合同交流会で「住み慣れた地域「望む場所」で最後まで自分らしい暮らしを支えるのテーマで講演とグループワーク、130名参加 「私の想いを伝えるノート」（内容追加）の普及開始、ACP普及啓発

※多職種連携合同交流会（R7.11.13実施）の参加者アンケートより

- ACP取組状況（取り組んでいる46人・取り組んでいない56人）
- 「私の想いを伝えるノート」の活用がまだ少ない、ACPの普及が難しい等

現時点での到達点（効果・今後について）

〔効果〕

- 市主催の「多職種連携合同交流会」で参加者アンケートを実施し現状を把握したうえで、ACPの研修を実施したため、より多職種での学びが深まった
- 気づきや学び・対応策等を実践現場に展開できるとともに、多職種で交流会・研修会・検討会のプロセスを大事にすすめることで、地域連携の強化につながった

専門職（多職種連携）研修（R8.1.20対面開催）

〔方法〕

- 市が主催の多職種研修会で研修の広報を実施。県のACPファシリテーターが1名在籍している病院にて開催、病院関係者が参加しやすいように、地域の中核的病院内で開催

〔参加者〕

- 67名参加（訪問看護師、病院看護師、居宅介護支援事業所、高齢者施設職員、地域包括支援センター、行政等の多職種・多施設が参加）

〔テーマ〕

- 「地域でつなぐACP～専門職（多職種連携）コース」
- ・ 講演「ACPの基本的な考え方」
- ・ 事例検討「本人の意向を大切にしたい意思決定をどのように支援し、実現に向けて地域でどのように支援するか」をテーマに、グループワーク。どのような支援が可能か、地域の医療・ケアの資源をどのように活用し連携して支援したらよいか検討した。

〔効果〕

- 多職種でACPについての基本的な考え方や進め方について共有化が図られた
- 圏域内に県のACPファシリテーターが少ない現状があったが、ファシリテーター養成講座に5名が参加

地区別ACP検討会（R8.2.13対面開催）

〔方法〕

- 既存の会議体である「在宅医療・介護連携推進連絡協議会準備委員会」を基盤にメンバーを構成

〔参加者〕

- 24名参加（居宅介護支援事業所、訪問看護、看護小規模多機能、医療機関、介護保健施設、地域包括支援センター、保健所、県、事業受託施設）

〔検討会で話し合われたこと〕

- 継続的な研修の実施で、繰り返しACPIに関しての基本的な姿勢について振り返り学びを深める
- 本人の想いをつなぐことがとても大切、地域の様々な職種・機関で患者の想いをつなぐ
- 地域の中でざっくばらんに話せる場づくり、民生委員や地区会長なども含めて検討する
- 元気なうちから話し合いを、「私の想いを伝えるノート」をお薬手帳のような感覚で手軽に活用
- 施設での看取り、ショートステイでの看取りも多い。ACPを早い段階から考えて支援する



〔工夫した点〕

- 県ACPファシリテーターが在籍する病院を開催場所としたことで、地域の中核病院と市のACP実践について学びや検討を深めることができ、人材育成と体制強化の両面につながった
- 完成していた「私の想いを伝えるノート」を活用するとともに、その人をどう支えるかというACPの内容を盛り込んだ人材育成の機会とした

〔今後について〕

- 多職種間での「本人の想いをつなぐ」連携と、日常的な場での対話促進を通じて、ACPの実践を深化させていく
- ACPファシリテーターや地区別ACP検討会参加のメンバーと、今後もACP実践のあり方について検討を続けていく